

## 論文要旨

### 欺瞞における意図の曖昧性に関する心理学的研究

黒川優美子

紹介教授:秋山学

嘘はきわめて日常的な現象であり、嘘の研究はこれまで数多く行われてきている(菊地・佐藤・阿部・仁平, 2007). 村井(2000)は、大学生に日記法を用いて1日についた嘘を1週間にわたって記録させた。その結果、1日平均で男性は1.57回、女性は1.96回の嘘をつくことが明らかになった。この結果は、DePaulo, Kashy, Kirkendol, Wyer, & Epstein(1996)の米国の研究とも類似しており、世界的に見ても嘘がありふれた現象であることが分かる。本研究では、このような私たちをとりまく嘘をテーマとし、研究を行った。

まず第I章において、本研究で取り扱う嘘について定義を行った。具体的には、従来の心理学研究において嘘の定義として用いられる虚偽性と意図性、そして嘘の動機について概説し、「虚偽性:不正確な情報」、かつ「意図性:相手をだます意図あり」の利己的嘘を取り扱うこととした。なお、本研究では、このような嘘を他の嘘と区別するために、欺瞞と呼んだ。これまで欺瞞研究においては、欺瞞の行為者が明確に意図して行った欺瞞が取り上げられてきた。しかし、私たちは常に意図して欺瞞を行っているわけではなく、時に自身にも嘘か誤りかが不明慮な欺瞞を行うことがある。このため、本研究では、意図したかどうかといった二分法で考えるのではなく、嘘か誤りかが不明慮な曖昧な欺瞞を含めて検討を行うこととした。このような曖昧な欺瞞は、明確に欺瞞か誤りかを区別できないため、従来の研究では、欺瞞かどうかを推定する形で実験が行われてきた。本研究においても、欺瞞と曖昧な欺瞞の個々の比率の検討を試みるため、個人レベルでの欺瞞推定課題を基盤にし、実験を行うこととした。そして、欺瞞検出の研究を取り扱っている犯罪心理学や、欺瞞抑制の研究を取り扱っている行動経済学での研究について概説した。特に本研究では、行動経済学で取り扱われるようなLow-stakeな欺瞞を取り扱うことで、曖昧な欺瞞の検討が可能になるようにした。この際、欺瞞の行為者自身が、欺瞞を観察する第三者(例:実験者)から、そ

の行為が欺瞞か誤りかがどの程度識別されていると感じているか、といった欺瞞の行為者自身の主観的評価である欺瞞の透明性についても考慮し、実験を行うこととした。さらに、これまで欺瞞研究において、意図の明確な欺瞞に焦点が当てられていることを問題点として提起し、欺瞞の意図性について概説した。具体的には、本研究において、嘘か誤りかが不明慮な行為、つまり曖昧な欺瞞を意図の曖昧な欺瞞とし、意図の明確な欺瞞だけではなく、意図の曖昧な欺瞞も踏まえた上で欺瞞を包括的に研究する必要があるとした。その上で、欺瞞の意図性を検討するため、欺瞞を行われる他者が存在しない、なおかつ欺瞞を行ったかどうかを曖昧で欺瞞を行うことを誘因づけられた場面において、欺瞞の出現がどのように変化するかを検討した研究 1、研究 1 の状況に関して他者が存在する場合における欺瞞の出現を検討した研究 2、研究 2 における欺瞞の行為者の生理反応を測定した研究 3 を行った。

上記を踏まえ、第 II 章では、研究 1 として、他者の存在しない場面において、欺瞞の意図が欺瞞出現に及ぼす影響を検討した。具体的には、欺瞞を誘発する課題を使用し、欺瞞の出現頻度や欺瞞を行ったことによって生じた結果について、オンライン実験で検討を行った。欺瞞の曖昧性の操作においては Pittarello ら(2015)の課題を使用した。この課題では、欺瞞の意図が推測されにくい状態を作り、欺瞞行為の正当化(Justification)が容易な状況を設定した。このような、欺瞞行為の正当化が行われやすい状況では、欺瞞の意図が曖昧となり、欺瞞の透明性が下がるため欺瞞が頻出することが考えられる。さらに、この課題では、欺瞞の行為者が実際の刺激よりもどの程度逸脱した結果を報告したかも観察可能であるため、欺瞞の回数だけではなく、欺瞞により生じた結果も検討可能であった。また、このような状況において、欺瞞を行うことを肯定的に捉える者や、繰り返し課題を行うことで欺瞞が上達すると考える者は、より欺瞞が容易に行え、欺瞞行為によって逸脱しやすいだろうと考え、嘘をつくことに対する認識(太幡, 2020)からの検討も行った。その結果、Pittarello ら(2015)と同様に、欺瞞の意図が曖昧であり、さらに欺瞞が動機づけられる場面においては欺瞞回数と欺瞞による逸脱が増加することが示唆された。特に、欺瞞回数では、欺瞞は上達すると考える者ほど、欺瞞の意図が曖昧であり、さらに欺瞞が動機づけられる場面において欺瞞回数が増加した。一方で、欺瞞による逸脱では、嘘をつくことへの認識と欺瞞意図の操作との関連は見られず、それぞれが独立して影響を及ぼしていた。これらの結果を踏まえ、本研究

では、欺瞞の回数や欺瞞による逸脱を同一視するのではなく、それぞれを異なる指標として捉えることが望ましいと言える。

しかし、研究 1 では、繰り返し欺瞞を行う機会があることによって欺瞞がどのように増加していくのか、といった欺瞞の時系列の検討を行っていない。また、今回は意図の曖昧な欺瞞がもたらす効果を検討するため、他者の存在しない場面を設定していた。しかし、日常場面では、欺瞞を行う際、欺瞞を行う相手から欺瞞が露見しているかどうかといった視点も重要な要因となってくる。このため、研究 2 では時系列や他者の存在といった要因を追加し、検討を行った。

第Ⅲ章では、研究 2 として、研究 1 で問題となった他者の存在および欺瞞出現の時系列的推移を検討した。具体的には、欺瞞を行う相手を明確にし、その相手から当該の行為がどのように理解されるかを意識させつつ、欺瞞の透明性を低めた状況を設定した。そして、繰り返し欺瞞を行う機会があることによって欺瞞が拡大していくのかを検討するため、欺瞞を繰り返し誘発する課題を実施し、欺瞞の出現頻度だけではなく、欺瞞の出現間隔も検討した。また、意図が明確な欺瞞と意図が曖昧な欺瞞の出現傾向や欺瞞の出現間隔も検討した。その結果、試行を経るごとに意図の明確な欺瞞の出現頻度が増加したことを示した。これは、欺瞞を繰り返し行うことにより、欺瞞の出現間隔が短くなり、欺瞞が次々に行われるためである。また、意図の曖昧な欺瞞は、意図の明確な欺瞞よりも出現頻度は高かったものの、試行を経るごとに増加するというよりも、常に一定の出現頻度であることが示唆された。これらの結果から、意図の曖昧な欺瞞な欺瞞は全体として行いやすいものの、繰り返し行うことにより、欺瞞に慣れが生じ、徐々に明確な欺瞞も行いやすくなったと考えられる。

第Ⅳ章では、行動指標だけではなく、生理指標の観点からも検討を行った。本章では、第Ⅲ章の結果を踏まえ、意図の曖昧な欺瞞と明確な欺瞞で欺瞞出現時に欺瞞行為者にどのような生理反応がみられるか、特に心拍率(Herat Rate; 以下 HR)に着目した検討を行った。その結果、意図の曖昧な欺瞞よりも意図の明確な欺瞞において、欺瞞後 0.5 秒で HR の減速が見られた。一方で、意図の曖昧な欺瞞では、正確に回答する場合の HR と差がなかった。このことから、意図の明確な欺瞞においては、HR に影響を及ぼすものの、意図の曖昧な欺瞞の場合、生理的にみても参加者自身が欺瞞を行っているとは強く意図するものではないことが示唆された。さらに、欺瞞回数を前

半と後半に分け、生理反応の検討を行った。その結果、意図の明確な欺瞞において、欺瞞の後半で HR の減速が見られ、特に欺瞞後 0.5 秒において顕著であった。一方で、意図の曖昧な欺瞞ではこのような減速が見られず、前半も後半も同様の HR が見られた。この結果から、意図の明確な欺瞞では、欺瞞を行うにつれて徐々に欺瞞を意識したことで、HR の減速が見られたのではないかと考えられる。

第 V 章においては、研究 1 から研究 3 までの内容を概説した。その結果、本研究では、意図の曖昧な欺瞞が行われやすいだけではなく、この欺瞞によって、より意図の明確な欺瞞を誘発することも示唆された。これは、小さな逸脱がより大きな逸脱へと導く「滑りやすい坂道(Slippery Slope)」(Welsh, Ordóñez, Snyder, & Christian, M. S., 2015)と同様の結果であると考えられる。ただし、本研究では、結果の大小というよりも、意図性がこのような滑りやすい坂道と同様の結果をたどるという点で新たな発見である。つまり、行為者が意図しない程度の欺瞞だったのが、繰り返すことにより意図した欺瞞の出現を高める可能性があるということである。そして、その背景には道徳的関心の低下の前段階として、自身の非倫理的行動を認識させにくくする「倫理的盲点(Ethical blind spot)」の存在があると考えられる。このような倫理的盲点を減らし、欺瞞を抑制させるために、今後は、欺瞞の可視性だけではなく、欺瞞の透明性も高める必要があることを示した。

一方で、本研究の課題として、欺瞞の行為者にとって欺瞞かどうか曖昧な状況を設定しており、欺瞞の受け手が実際は欺瞞をどのように認識していたかまで把握できていないことが挙げられる。このため、今後は欺瞞の行為者だけではなく、欺瞞の受け手から実際にどのように欺瞞が捉えられていたか、受け手の目線で検討する必要があると考えられる。また、本研究では、欺瞞の透明性を低めていたものの、先行研究ほど高い欺瞞表出は見られなかった。この点について、オンライン実験であったとしても、実験をしているという認識をいかに減らしていくかについても考えていく必要がある。

本研究では、欺瞞の中でもより、意図の曖昧な欺瞞に焦点を当てつつ、意図の明確な欺瞞との比較を行ってきた。その結果、明確な意図の欺瞞だけではなく、意図の曖昧な欺瞞も欺瞞研究を行う上で重要な指標となることが明らかにされた。以上のように、本研究は、欺瞞を意図性の側面から検討し、包括的に捉えた研究として大いに意義深いと言える。特に、意図の曖昧な欺瞞が意

図の明確な欺瞞を助長する要因である可能性を提起できた部分は、今後の研究に一石を投じるものである。